

部活動における交流の様子

■ 部活動における交流活動の様子

- 生活奉仕部では、調理や地域清掃、花壇の球根植えなどの活動を行いました。Eさんにとって、どの活動もイメージが持ちやすかったため、積極的に取り組むことができました。
- 交流の回数を重ねることで、Eさんは自分から地域指定校の生徒に関わるようになりました。それに応じて、地域指定校の生徒も自然とEさんに作業をお願いしたり、手助けをしたりできるようになりました。
- 地域の清掃をしているときに、地域の人から感謝の言葉をいただくと、Eさんはとても嬉しそうでした。
- また、Eさんは、部活動に参加する日は学校から一旦帰宅してから、中学校へ出掛けました。時間になると、Eさんは制服に着替え直してから出発しました。「自分は〇〇中学校の一員」とEさんが自覚している様子がうかがえました。



交流の成果

本交流事例では、部活動における直接交流を実施したことにより、以下のような成果がありました。

- (1) Eさんは、自分が好きな活動であり、少人数の生活奉仕部で活動できたため、自分から積極的に参加することができました。
- (2) 生活奉仕部の部員は、交流を継続することによって、自然とEさんと関わるできるようになりました。
- (3) 地域指定校の文化祭では、生活奉仕部の活動紹介がパネルで行われたことにより、地域指定校の生徒がEさんへ声を掛けてくれる場面も増えました。
- (4) 生活奉仕部での交流を地域指定校の保護者へ伝えることにより、副籍交流についての理解啓発を図ることができました。
- (5) Eさんの保護者からは、以下のような感想が聞かれました。
 - ・ クラスで交流をしていたときは、Eが感じていた中学生の持つ複雑な心理と交流に対する心の持ち方がうまくかみ合わず、中学校での交流の難しさを実感しました。しかし、交流の場を部活動に切り替え、Eが積極的に活動している姿を見て安心しました。現在、部活動には同学年の生徒がいないのですが、それよりも学年を問わず、地域の人にEを知ってもらい、関わりが持てていることが大切だと思いました。



この事例から、本人の興味や関心を大切にした部活動においても、充実した交流活動が分かりました。

【事例⑥】 子供同士が顔を合わせる間接交流の実施

事例の概要

【肢体不自由特別支援学校小学部4年生 Fさん】

Fさんの保護者は、地域で同世代の児童と直接ふれあう機会がほしいと思っていましたが、Fさんの体調などを考え、これまで間接交流を行っていました。

お便り交換などを行う間接交流では、直接交流に比べて、子供同士が顔を合わせることが少なく、子供同士のふれあいに結びつきにくい場合があります。

そこで、本事例では、年度初めに特別支援学校と地域指定校間で、Fさんと保護者がお便り交換のために来校する日時を調整してから、間接交流を開始しました。

その結果、地域指定校の児童とFさんが、毎回直接顔を合わせた上でお便り交換をすることができるようになりました。これにより、子供同士がふれあう場面が増えるとともに、地域指定校の学級担任と保護者が情報交換したりするなど、交流の深まりが見られました。

今では、Fさんがお便りを届けに来る姿は、地域指定校の日常の風景になりました。

交流活動への期待

【地域指定校の児童への期待】

- Fさんへの親近感を深め、地域でも交流することができるようになってほしい。

【Fさんへの期待】

- 地域指定校の児童や担任教員に会うことや、お便りを受け取ることを楽しみにしてほしい。

期待する姿を引き出すための工夫

特別支援学校では

■ 来校日の日程調整

年度初めに、学級担任が地域指定校の教員とお便りの交換を行う曜日・時間を調整するとともに、Fさんの様子や保護者の希望を伝えました。

■ 個人通信の作成

保護者の了解の上、Fさんの個人通信を作成し、地域指定校に掲示を依頼しました。

小学校では

■ 児童への来校日の周知

事前に児童へFさんが来る日を伝え、Fさんを迎えられるようにしました。

■ Fさんが持参したお便りの教室掲示

お便りを教室に掲示し、地域指定校の児童が普段から見るができるようにしました。

交流の様子

■ お便り交換の様子

- Fさんが地域指定校を訪れる毎月第一月曜日の15時半には、玄関で地域指定校の児童と学級担任がFさんのことを迎えてくれるようになりました。
- Fさんが到着すると、地域指定校の児童は進んで「Fさん」と声をかけてくれました。交流が始まった頃は、声をかけられることに戸惑いがあるようでしたが、今では笑顔を見せたり、声を出して笑ったりすることも増えてきました。
- 保護者が、地域指定校の学級担任と、Fさんの最近の様子や地域指定校の話題を情報交換していると、Fさんは嬉しそうにその話を聞いていました。

顔を合わせる間接交流の成果

本交流事例では、顔を合わせる間接交流を実施したことにより、以下のような成果がありました。

- (1) Fさんは、地域指定校を毎月訪問し、児童や学級担任と会うことを楽しみにするようになりました。
- (2) Fさんと顔を合わせてお便りの交換を重ねることで、地域指定校の児童のFさんに対する理解が少しずつ深まりました。
- (3) 地域指定校の他の学級の児童が、校内に掲示されたFさんの個人通信を見て、Fさんのことを知り、声をかけてくれるようになりました。
- (4) 特別支援学校の学級担任が地域指定校を訪問し、お便り交換の日時を調整するとともに、保護者の希望やFさんの様子について情報共有したことは、円滑に交流を進める上で有効でした。
- (5) 顔を合わせた交流を継続したことにより、地域指定校の展覧会にFさんの作品を展示する計画が立てられました。地域指定校から招待状が届くと、行事参観は考えていなかった保護者も、Fさんと一緒に展覧会に参加しました。
- (6) Fさんの保護者からは、以下のような感想が聞かれました。
 - ・ 副籍を通して地域でも子供たちとふれあえる楽しさを感じることができました。また、地域指定校の子供たちに顔と名前を覚えてもらい、街でも声をかけてもらえるようになりました。わが子も声をかけられると、とても嬉しそうです。



この事例から、お便り交換などの間接交流でも、日時を決めるなどの工夫を行うことで、子供同士がふれあうことのできる交流になることが分かりました。